

第3章 家族生活

お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科教授

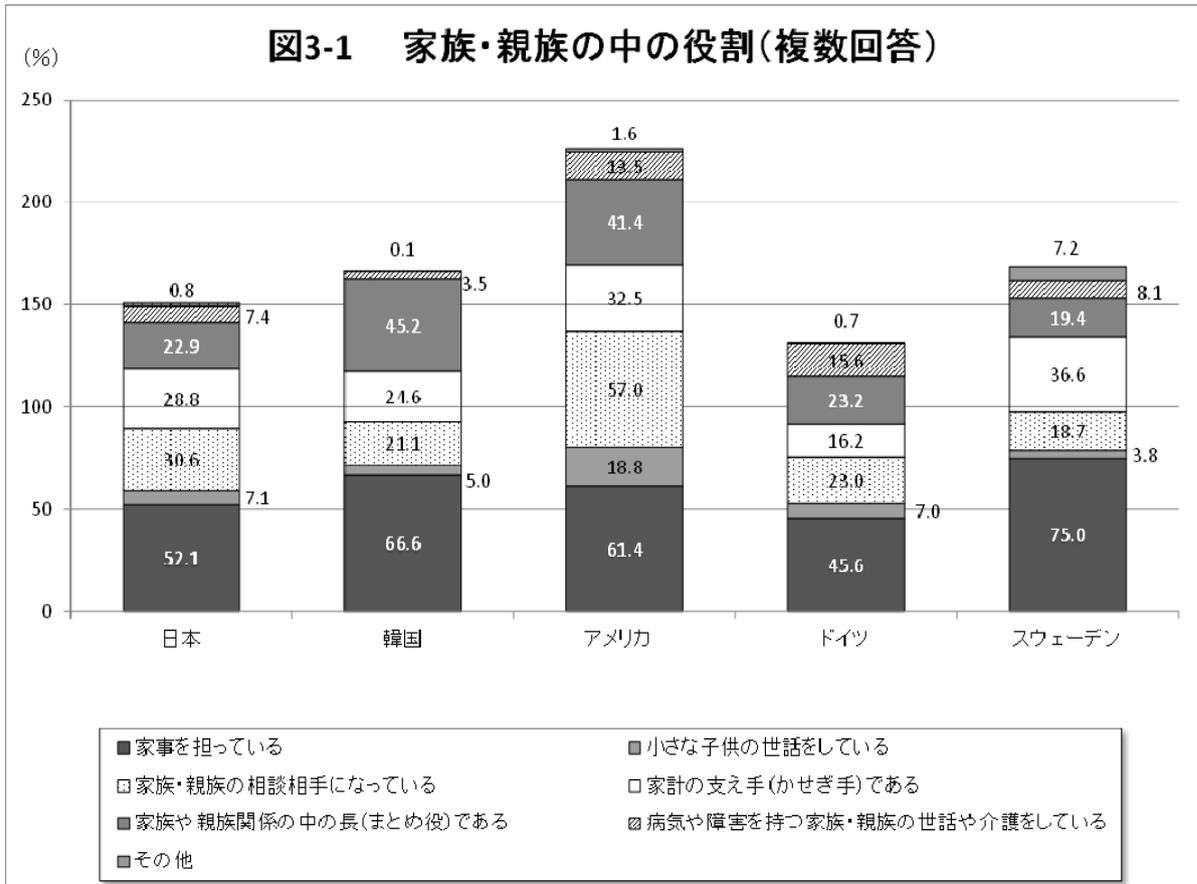
藤崎宏子

I 家族・親族の中の役割 (Q3)

1 調査結果の概要

高齢者たちは、家族・親族のなかでどのような役割を果たしているのだろうか。図3-1は、「家事を担っている」「小さな子供の世話をしている」から「その他」まで含めて、7項目の各選択肢に対する肯定率を積み上げたものである。複数回答の合計比率に注目すると、アメリカは226.2%と群を抜いて高い値を示すのに対し、日本、韓国、ドイツ、スウェーデンは131~169%と相対的に低い値に留まっている。各国回答者の平均回答項目数、すなわち一人が平均何種類の役割を担っているかをみると、多い順に、アメリカ2.26、スウェーデン1.69、韓国1.66、日本1.50、ドイツ1.31、という結果である。個人が担う役割の多さは、一方では心身の負担にもなるが、もう一方で他者との絆を強め自らの存在感や有用感を確認する源泉ともなる。その意味では、アメリカの高齢者は、家族生活の中の存在感や有用感を最も強く感じているのかもしれない。なお、第6回調査においては、韓国がアメリカをわずかに上回って最も高水準を示していたが、今回は3位とはいえ、日本と大きな差はみられなかった。日本については第6回から第7回にかけて、1.29から1.50へと0.3ほど数値が上がっている。また、ドイツが5カ国中最も低い値を示した点も、注目に値する。

具体的な役割の内容に注目すると、いずれの国でも「家事を担う」を挙げるものが最も多い。ただし、日本とドイツにおけるその比率は52.1%、45.6%と、スウェーデン75.0%、韓国66.6%、アメリカ61.4%などに比べて相対的に低い値を示している。日本におけるその他の項目に注目すると、「家族・親族の相談相手」「家計の支え手」「家族や親族関係の中の長」が、23~31%で次いでいた。



2 時系列的变化

家族のなかの役割を問う質問項目は、第1回調査からあるが、第5回では回答者の範囲が変更されるとともに、質問文および選択肢に若干の修正が加えられた。回答者の範囲は、第4回までは単身者を除いてたずねていたのだが、第5回以降は全員に問う設問とした。また質問文については、第4回までは、「ご家族の方々の生活に何か役に立っていると思いますか」とたずねていたものを、第5回以降は「ご家族や親族の方々の中でどのような役割を果たしていますか」という表現をとった。さらに選択肢については、質問文の変更に合わせて各項目の表現を若干修正するとともに、「病気や障害を持つ家族・親族の世話や介護をしている」を新たに加えた。このような変更と修正は、近年における高齢者の家族形態や家族関係の変化を考慮するとともに、単身者であっても、家族・親族ネットワークのなかで一定の役割を果たしている場合があることを想定したためである。

以上のような事情により、本データによっては時系列的な変化を正確にとらえることはできない。しかしここでは、近似的に時系列的变化の趨勢を把握するため、第5回以降の調査データについては単身者を除外して、第4回までと条件の近いサンプルとなるよう統

制した上で単純集計結果を求めた。その結果が、表3-1である。

日本の第6回から第7回調査にかけての変化に注目すると、前述の通り合計比率が30%ほど上昇したことを反映して、多くの項目で若干の比率の上昇がみられる。しかし、高い比率を示す項目はおおむね前回調査と似通っており、「家事を担う」「家族・親族の相談相手」「家計の支え手」「家族や親族関係の中の長」などである。第1回からの長期的な動向については、「小さな子供の世話」「家族・親族の相談相手」「家族や親族関係の中の長」などのポイントが低下している。一方、大きな違いとはいえないものの、「家計の支え手」は今回30.6%と、過去6回に比して最も高い値を示した点は注目される。また、第5回から新たに加えた「病気や障害を持つ家族・親族の世話や介護」が、6.4%、6.5%、7.8%とわずかずつではあるが上昇傾向にあることも、今後注目していく必要があるだろう。

なお、「特に役割はなし」とする人は、第1回から第4回までは5ポイント前後にとどまっていたものが、第5回21.7%、第6回17.0%、そして第7回の14.0%と一定の比率を占めるようになってきた。前述したように、役割を持つことが、自らの存在感や有用感の源泉になっているとすれば、憂慮すべき現象といえよう。

表3-1 家族・親族の中の役割（時系列）

(同居している家族がいる方に) ○付数字は順位（複数回答）(%)

	日 本							ア メ リ カ						
	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	第7回	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	第7回
1 家事を担っている	36.9	37.9	43.5	43.1	40.7	45.1	①50.2	84.8	88.0	81.6	84.1	76.9	67.0	①71.8
2 小さな子供の世話をしている	16.1	13.6	15.0	12.5	7.8	4.9	7.8	9.2	12.5	19.8	19.6	14.8	16.7	22.2
3 家族・親族の相談相手になっている	40.8	40.7	42.8	42.5	26.0	27.1	②32.9	72.9	80.9	69.7	74.5	49.5	52.4	②63.1
4 家計の支え手（かせぎ手）である	26.5	26.6	28.8	29.8	26.6	23.8	③30.6	26.4	26.6	21.6	26.0	59.9	24.3	33.5
5 家族や親族関係の中の長（まとめ役）である	33.5	33.1	30.7	30.3	19.3	25.1	25.5	53.4	61.4	52.4	48.2	50.5	34.4	③39.6
6 病気や障害を持つ家族・親族の世話や介護をしている					6.4	6.5	7.8					19.9	13.0	17.8
7 その他	20.1	24.6	25.4	26.7	3.1	2.1	0.9	43.8	61.9	16.5	15.9	6.5	0.8	1.3
8 特に役割はない	6.8	7.2	4.1	4.7	21.7	17.0	14.0	-	0.7	2.3	1.0	2.9	9.9	6.3
無回答	3.3	6.0	4.9	3.3	-	-	-	1.4	0.5	1.9	3.4	0.2	-	0.6
	韓 国							ド イ ツ					スウェーデン	
	第1回	第3回	第4回	第5回	第6回	第7回	第3回	第4回	第5回	第6回	第7回	第5回	第7回	
1 家事を担っている	51.9	68.2	64.4	55.3	60.4	①68.1	54.4	56.7	72.7	52.7	①55.4	85.2	①65.2	
2 小さな子供の世話をしている	36.6	28.9	19.6	10.5	14.0	6.2	12.5	14.0	8.0	7.1	9.3	4.9	3.3	
3 家族・親族の相談相手になっている	43.2	56.8	49.5	16.9	40.7	24.7	52.9	66.8	20.7	27.7	②28.5	17.1	③20.6	
4 家計の支え手（かせぎ手）である	12.7	19.9	20.3	22.3	35.8	③27.0	38.1	49.8	39.7	19.0	24.2	59.2	②26.2	
5 家族や親族関係の中の長（まとめ役）である	35.3	45.4	45.8	33.5	63.5	②49.4	35.6	36.8	39.2	28.0	③27.1	14.7	10.9	
6 病気や障害を持つ家族・親族の世話や介護をしている				5.1	5.0	4.2			13.7	15.4	18.6	8.7	8.5	
7 その他	2.3	3.2	5.6	0.1	0.4	0.1	12.2	11.0	2.2	3.4	0.3	0.2	9.4	
8 特に役割はない	15.2	8.6	10.0	17.5	8.2	6.7	4.9	1.6	4.5	18.6	17.9	4.2	14.8	
無回答	-	2.5	1.4	-	-	-	5.1	2.8	0.3	-	0.3	-	-	

他国の状況に関して、いくつか目につく特徴を挙げておく。韓国では、第1回から第7回にかけて、「小さな子供の世話」は36.6%から6.2%へ、「家族・親族の相談相手」は43.2%から24.7%へと、大きく低下した。対照的に、「家計の支え手」「家事」は比率が高まる傾向を確認できる。日本以上に家族主義的な傾向が強い韓国においても、いわゆる家族の個人化傾向が進展しつつあるのかもしれない。

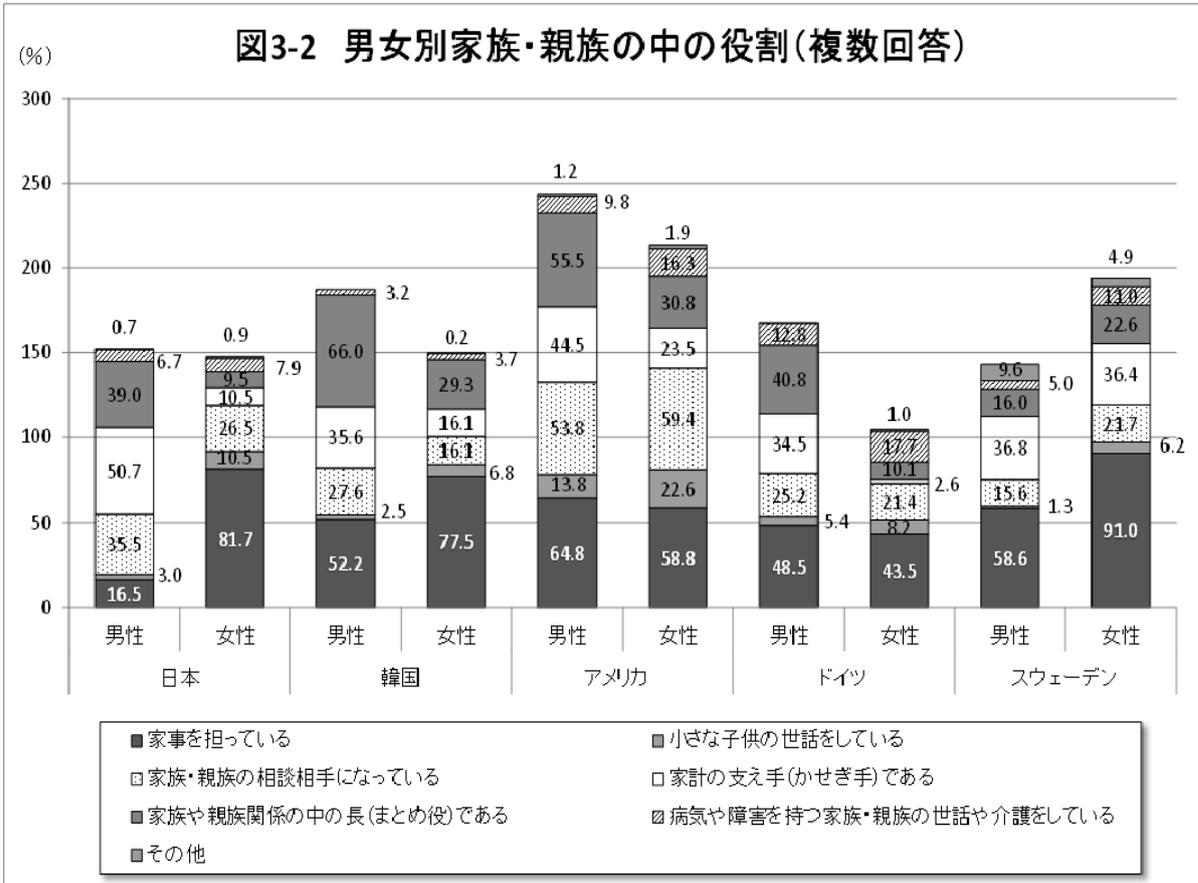
「小さな子供の世話」と「病気や障害を持つ家族・親族の世話や介護」という役割は、前者は世代間、後者は一般に世代内で行われるとはいえ、「ケア役割」という観点からは同質的なものとみなすことができる。今回の調査で、この両方において最も高い比率を示すのはアメリカで、それぞれ22.2%、17.8%であった。「小さな子供の世話」に関しては、アメリカ以外の国はすべて10%未満で大きな差はみられないが、「病気や障害を持つ家族・親族の世話や介護」に関しては、アメリカに次いでドイツの18.6%が目立った。以上のことから、とくにアメリカにおいて、世代間・世代内のケア役割が高齢者に期待されていることがわかる。近年の構造不況を背景とする福祉予算の削減や自己責任を問う風潮が、高齢者自身がケア役割を担うことへの期待を強化しているのかもしれない。

3 男女別比較

図3-2は、7種の役割項目に対する肯定率を、国別・男女別に積み上げたものである。図3-1で指摘した、担当役割の合計比率はアメリカが最も高いという傾向は、男女別にも変わらない。各国における一人あたりの担当役割の平均個数を多い順にみると、男性については、アメリカ2.43、韓国1.87、ドイツ1.67、日本1.52、スウェーデン1.43となっている。女性については、アメリカ2.13、スウェーデン1.94、韓国1.50、日本1.48、ドイツ1.05という値であった。

日本について、具体的な役割項目の男女差に注目すると、「家事を担う」という回答は、男性16.5%、女性81.7%と、大きなアンバランスがある。他の4カ国において、男性が「家事を担う」割合は、48.5%（ドイツ）から64.8%（アメリカ）までの範囲であることに比べて、日本の高齢男性の家事参加率の低さが際立っている。他方、「家計の支え手」「家族や親族関係の中の長」「家族・親族の相談相手」に関しては、男性の50.7%、39.0%、35.5%が担当しており、女性の10.5%、9.5%、26.5%を大きく上回っている。日本において、男性が生活費を稼いで家族を統率し、女性は日常的な家事を担当するという性別役割分業は高齢期においても強固に維持されており、このような傾向は第6回調査時と同様である

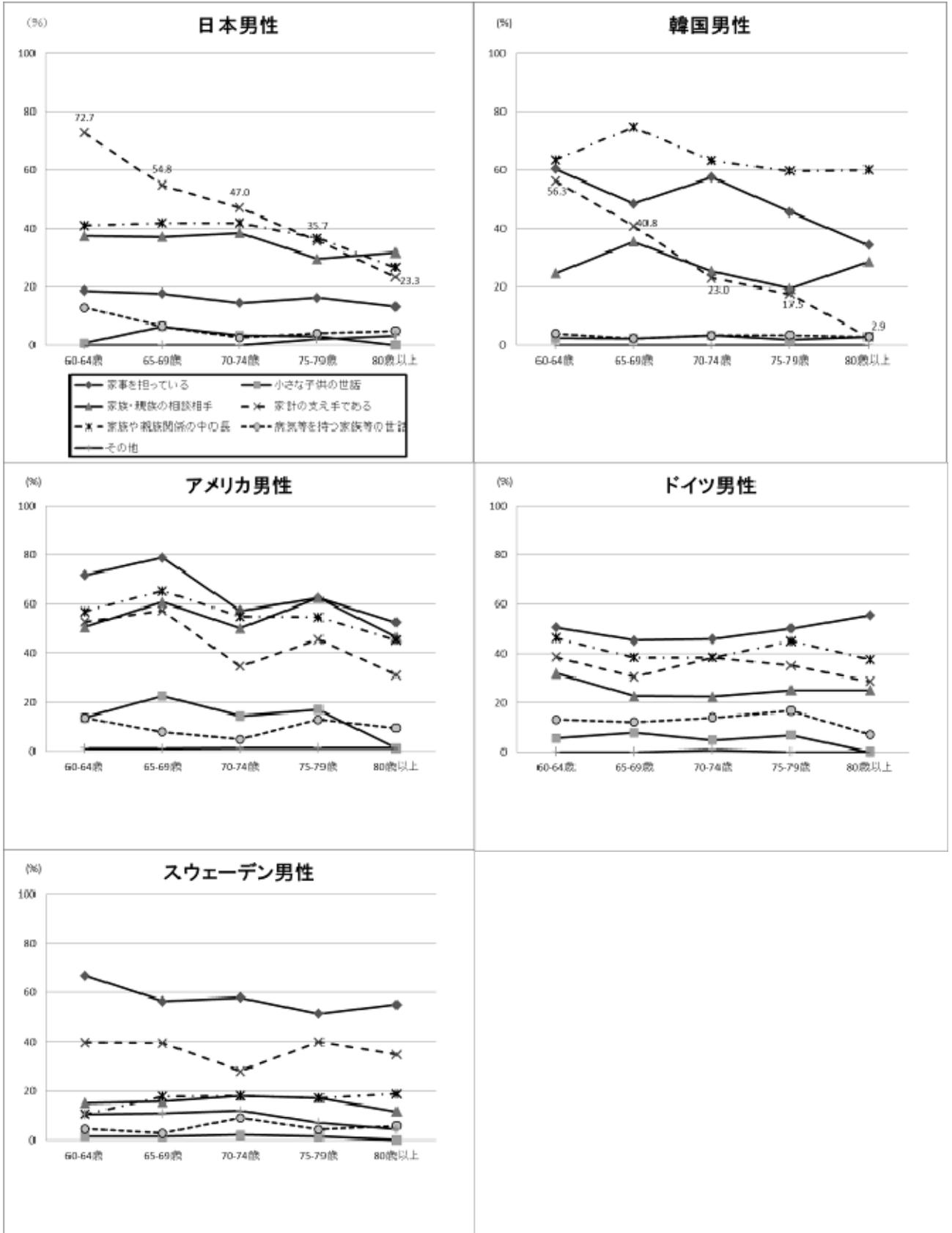
とともに、今回の調査対象5カ国中最も顕著であった。

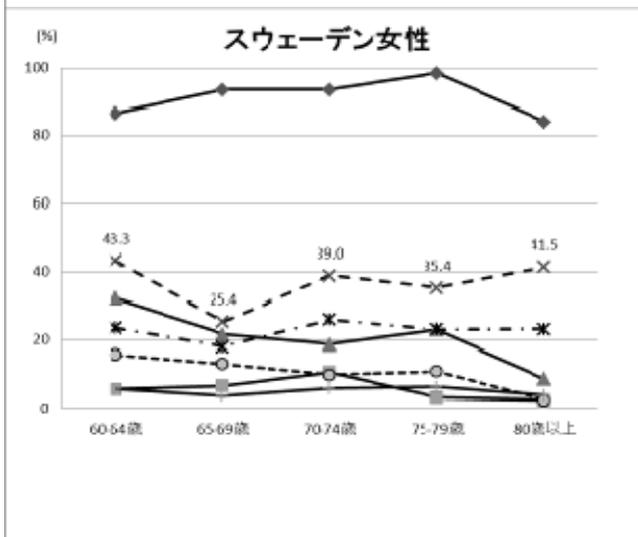
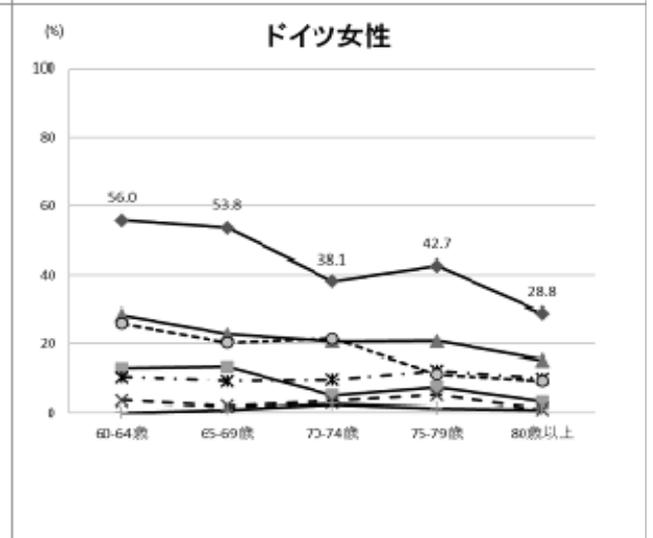
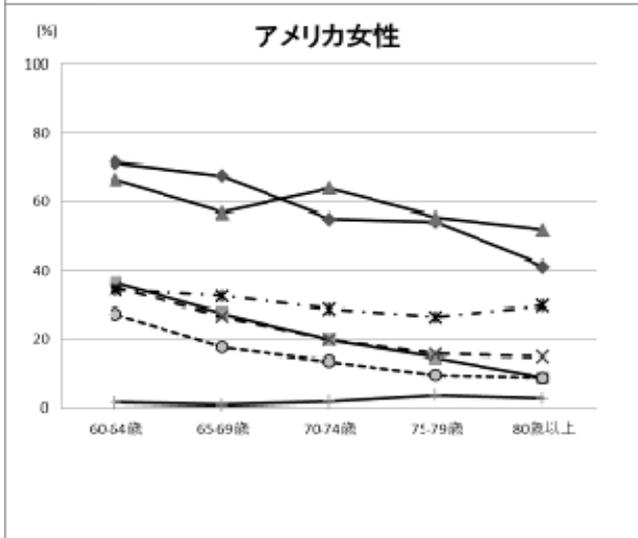
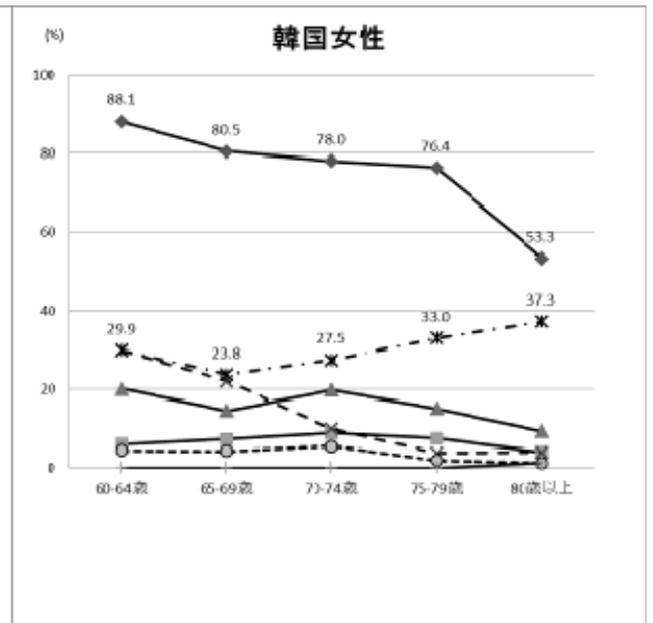
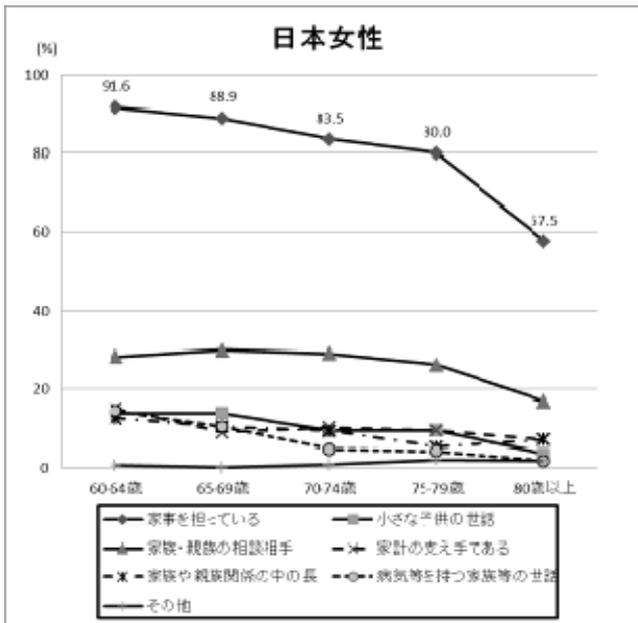


4 年齢階層別比較

前項で確認したように、高齢者が家族・親族の中で果たしている役割の内容には男女差がみられ、とりわけ日本ではその差が顕著であった。このため、年齢階層別の差異をみるにあたっては、男女別にサンプルを分けた上で集計を行った。また、5歳刻みの年齢区分を行うと、各国ともに年齢が高い層ほどサンプル数が減少する。とくに85歳以上のカテゴリーでは、韓国の場合22人(男性3人、女性19人)と限定されるため、個別的な傾向が強く結果を左右する。このため、本章の分析では、以下、一貫して「80歳以上」に一括して扱うことにする。その結果は、図3-3に示した通りである。

図3-3 男女別・年齢階層別・家族・親族の中の役割





まず男性のデータに注目しよう。日本の男性は、年齢階層が高くなるにしたがって、「家計の支え手」を挙げるものの比率が 72.7%から 23.3%まで大幅に低下する。しかし、「家族・親族の相談相手」「家族や親族関係の中の長」などの比率は低下傾向にあるとはいえ、相対的に安定している。「高齢者」もしくは「親」という権威に裏付けられた象徴的な役割は、加齢の影響が及びにくいようである。

韓国男性の場合、60歳代前半において「家事を担う」「家計の支え手」「家族や親族関係の中の長」を挙げる人が6割前後を示す。この内「家事を担う」「家族や親族関係の中の長」に関しては年齢段階が上がっても相対的に維持されているのに対し、「家計の支え手」については、80歳以上における2.9%にまで急激に低下をしていく。「家計の支え手」の変化は日本男性以上に大きなものがあるが、韓国男性の場合、「家族や親族関係の中の長」の役割がほぼ60%と最も高い水準で安定している点は、日本男性にはみられない傾向である。

アメリカ、ドイツ、スウェーデンの3カ国の男性は、全般的に、日本や韓国に比べて年齢階層の高まりにともなう大きな役割の変化みられない点が特徴的である。これら3カ国ともに、「家事を担う」役割が最も高い比率で維持され、これに「家族や親族関係の中の長」「家計の支え手」などの役割が次いでおり、全般的な安定が保たれている。ドイツ男性については、「家事を担う」を挙げる人の比率が、いったん低下した後むしろ上昇する傾向も確認できる。これら3カ国は日本や韓国に比べて子どもとの同居率は低いものの、年齢の高まりにもかかわらず、親族ネットワークの中で一定の役割を果たしていると自覚されているようだ。

次に女性のデータをみることにしよう。まず日本女性に注目すると、女性総数についてみた場合と同様に、「家事を担う」を挙げる人が突出する傾向がすべての年齢層を通じて確認できる。ただし、その比率は、年齢階層の高まりとともに91.6%から57.5%へと低下する。他の6項目もおおむね減少の方向にあるが、もとの比率が高くないこともあって大きな変化とはいえない。

日本女性と比較的似たパターンを示すのはドイツの女性である。「家事を担う」が一貫して最も高い比率を示すものの、加齢とともに56.0%から28.8%へと低下していく。他の役割項目は全体として比率は高くないものの、年齢段階の上昇とともに緩やかに低下していく傾向をみてとることができる。

韓国とスウェーデンの女性は、「家事を担う」が他の役割に比して高い水準にある点は同様である。韓国女性に関しては加齢とともにその比率が88.1%から53.3%へと低下するが、

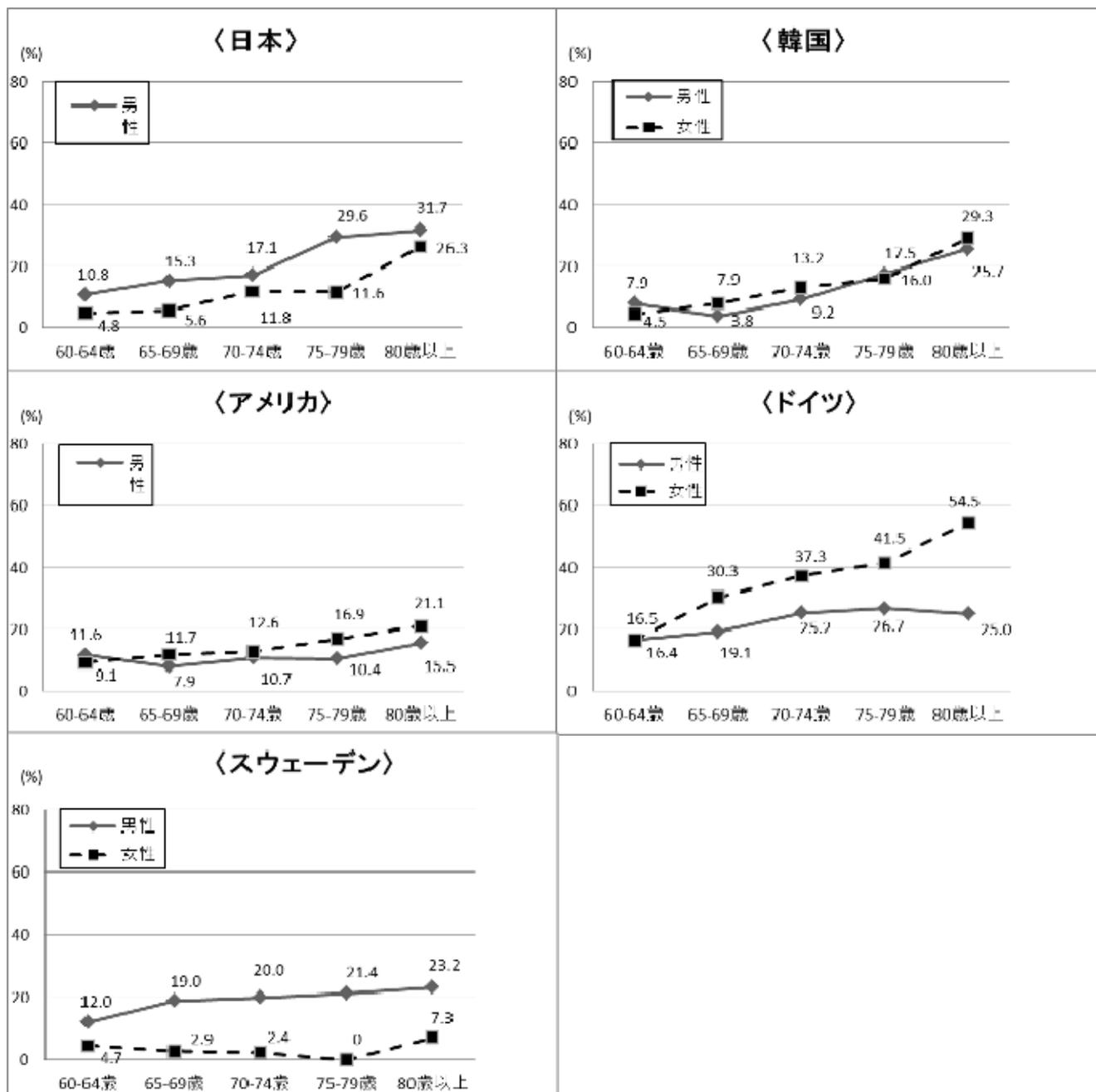
スウェーデン女性は全年齢階層を通じて8～9割を維持している。さらに、両国ともに、加齢とともに比率を落とす役割がある一方で、むしろ比率が変化しないか上昇する役割もあることが注目される。韓国女性の「家族や親族関係の中の長」(29.9%→37.3%)、スウェーデン女性の「家計の支え手」(25.4%→41.5%)などがその一例である。

最後にアメリカ女性については、ほとんどすべての役割の比率が加齢とともに低下を示すとはいえ、その変化は緩やかである。また他の4カ国とは異なり、「家事を担う」に加えて「家族・親族の相談相手」が全年齢層を通して上位にある点も特徴的である。「家族や親族関係の中の長」については、一貫して3割前後の比率を示している。アメリカでは、女性は男性と同様に、高齢期の役割が多様であり、加齢にともなうその変化も小幅なものにとどまっている。

この設問の選択肢には、これまでに紹介してきた7項目に加え、「特に役割はない」という選択肢も用意されている。そこで、7項目のいずれにも○をつけず、「特に役割はない」と回答した人の男女別・年齢階層別比率に注目し、これを図3-4に示した。全般的には、国や性別の違いを越えて、年齢階層が高くなるほど「特に役割がない」とする人の比率がおおむね高くなる傾向がみられる。ただし、その変化の幅は、国により性別により差異がある。アメリカ男性・女性、ドイツ男性、スウェーデン男性・女性などは、60歳代前半から80歳以上にかけて「特に役割はない」人の比率は増加するとしても、せいぜい2倍程度に収まっている。一方、日本男性・女性、韓国男性・女性、ドイツ女性については、3倍以上の増加を示しており、加齢にともなう役割の変化が大きい傾向が読み取れる。

比率の高低ということでは、60歳代前半から80歳以上にかけて、ドイツ女性は16.4%から54.5%へと、変化の幅も大きく最終的なその水準もきわめて高いことが目につく。一方、スウェーデン女性は、4.7%から7.3%へと、変化の幅、水準ともに低いものにとどまっている。なお、日本に関しては、男性は10.8%から31.7%へ、女性は4.8%から26.3%へと「特に役割はない」という人が増加していた。

図3-4 年齢階層別・家族・親族の中で「役割がない」人



5 同居者の有無による差異

すでに述べたように、この設問は第5回調査以降、単身者も含めて全員にたずねている。たとえ家族・親族と同居していなくとも、相互に日常的な交流があり、そこに形成されるネットワークの中で高齢者が一定の役割を果たしていることが想定されるためである。しかし実際には、役割のありようは、同居者の有無により異なる可能性がある。そこで、各国のデータにつき、同居者の有無別に高齢者の役割担当状況をみることにした。なお、ここでいう同居者とは、大半が家族・親族であるが、ごくわずかそれ以外の他人である事例も含まれている。

図3-5をみると、スウェーデン以外の4カ国では、単身者は同居者がいる人に比べて役割のレパトリーが少ない傾向がみいだせる。日本についてみると、「家族・親族の相談相手」「家計の支え手」「家族や親族関係の中の長」などの項目において、同居者がいる人は単身者より高い比率を示しており、担当役割の平均個数は、単身者 1.08、同居者あり 1.56と0.5程度の差異がみられた。

一方、スウェーデンの場合、担当役割の平均個数は、単身者 2.17、同居者あり 1.44と逆転していることが注目される。その内訳をみると、「家事を担う」（単身者 94.2%、同居者あり 65.2%；以下同順）、「家計の支え手」（56.8%、26.2%）、「家族や親族関係の中の長」（35.7%、10.9%）などの項目で、単身者のほうが高い比率を示す。家事や家計の担い手・支え手であることが、自分自身のためだけに行われるのか、あるいは別居家族も含めた親族ネットワーク内で考えられているのかは定かではないが、スウェーデン人の場合、そうした日々の暮らしの基本部分を自身が担っているという自覚があるようだ。また「家族や親族関係の中の長」という象徴的な役割についても、たとえ同居という前提がなくとも担いうるものと認識されている様子がみてとれる。なお、全体として最も高い合計比率を示したのはアメリカの「同居者あり」のグループで、一人の担当役割の平均個数が 2.49であった。